

保

無宿人御子神の太士口下

無宿人御子神の丈吉(下の二)

昭和四十八年五月二十八日第二刷

著者〓笹沢左保

発行者〓野間省一

発行所〓株式会社 講談社

東京都文京区音羽二一二二二二一 郵便番号一一二
電話東京九四五一一二二大代表 振替東京三九三〇

印刷所〓豊国印刷株式会社

製本所〓黒柳製本株式会社

定価〓五四〇円

Printed in Japan

© 笹沢左保 一九七三

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

目次

第十話	人形は野分に舞った	五
第十一話	地獄へ影は走った	六三
第十二話	土砂降りの天を突く	一三三
第十三話	街道は死を待った	一九三

画
岩田専太郎
装幀
山内
暲

第十話

人形は野分^{のわき}に舞った

1

中山道を、信州追分の宿で南へそれる。正確に言えば、追分のすぐ東にある借宿かりどきから、この道は分れている。和美峠を越え、初鳥屋に出る。あとは本宿、下仁田、一の宮、富岡、福島、吉井、藤岡を過ぎて本庄で再び中山道にぶつかる。

この脇街道を、一般的には追分街道と呼んでいた。だが、別名もある。姫街道と、称されていたのだった。姫街道というのは、ここに限りあるものではない。全国にわたり、幾つかの脇街道が姫街道という別称を持っている。

これは、女が利用する街道という意味が、含まれているのであった。各地に設けられている関所は、女の通行に対してとりわけ厳重だった。殆どほとどの関所が、登り下りに拘かかわらず、女の通行手形を要求した。

したがって、女は厳しい関所を避けて、道中をしたがる。同時に、峻しい山道は、女の足に不向きであった。また、大名が利用したり武士の往来が激しい街道は、女の散逸するところになった。

嚴重な関所がないこと、比較的歩きやすい道、大名や武士があまり利用しない街道、とこの三つの条件が揃ったとき、そこに姫街道が成り立つわけであった。そうした意味で、この追分街道は姫街道と称されるのに相応しかったのである。

信州から上州へ入り、やがて下仁田を過ぎる。下仁田から三里半、約十四キロ行くと富岡の宿だった。十月も下旬となり、上州の空は冷たそうに青かった。まだ風は、それほど鋭くはない。しかし、六ツ半を過ぎたばかりの日差しには、風の冷たさを消すほどの強さは感じられなかった。六ツ半は、午前七時である。

その渡世人も、道中合羽の前を合わせて、足を運んでいた。薄汚れた三度笠を、目深にかぶっていた。渡世人は今朝早く、下仁田の宿を立ててきたのだった。かなり、歩くテンポが速かった。

渡世人が足の運びを緩めたのは、富岡の宿に入って間もなくのことであった。渡世人は緩慢な動きで、道中合羽の前を開いた。雑巾と変わらないような手甲脚絆をつけ、今にもすり切れそうな草鞋をはいていた。

鉄環と鉄鎧で固めた長脇差の黒鞘が、鈍く光っている。鉄色の鐔が、大きくて頑丈そうだった。渡世人は、左手で三度笠の前を持ちあげた。のびた月代が、風に揺れながら覗いた。

眉が太く、鼻が高い。やや唇の色が悪く、そのせいか歯の白さが目立っていた。彫りの深い顔に、鬚りが漂っている。虚無的に暗い眼差しが、遠くを眺めやっているようであった。三十になるかならないかの年に見えた。長身で、痩せていた。

秋深い上州の寂しげな風景に、その渡世人の姿はピッタリであった。宿内の人々が、両側の軒下へ逃げ込むのが見られた。富岡は、前田丹後守の領地である。宿場としてだけではなく、市場町ということでも賑っていた。

騒ぎが起これば、人が逃げ散るのも不思議ではない。馬も多かった。砥沢とぎというところで産出される砥石とぎしが、幕府御用になっている。その幕府御用砥の輸送に、この街道が使われていたからである。

人馬が右往左往して、ちょっとした混乱が起ったのだった。人々が軒下に逃げ込んだあと、宿場を貫いている街道が目の前に開けた。そこに、男が四人ほどいた。いずれも、渡世人と知れる風体であった。

一人だけが道中支度であり、あとの三人は着流しだった。それぞれ、抜き放った長脇差を手にしていた。

「どこの何者か、さっさと名を聞かしたらどうなんだい！」

着流しの渡世人の一人が、張りあげた声で怒鳴った。

「知ったことかい」

道中支度の渡世人が、そうやり返した。その渡世人のほうが、はるかに落ち着いていた。顔つきも声も、冷静であった。

「そんなことじゃあ、この場は通らねえぜ！ ド素人じゃあるまいし……」

「そうよ。聞いたふうなことを吐ぬかすと、すぐにでも命を捨てなくっちゃあならねえぞ」

「一の宮の又兵衛の身内だと、こちらには早々に名乗りをあげているんじゃないか」

「作法も仁義も弁^わまえていねえらしいな」

三人の男たちが、口々に喚^わきたてた。渡世人同士の、争いごとであった。三人は、一の宮の又兵衛の身内だという。この土地の渡世人と、見てよかった。土地の親分のところの若い者たちが、通りがかりの渡世人に文句をつけたらしい。

御子神の丈吉は、いったん足を止めた。だが、すぐまた歩きだした。何の騒ぎであるか、見定められたからである。渡世人同士の喧嘩など、御子神の丈吉には興味の対象にもならなかったのだ。

軒下に列を作った宿内の人々が、丈吉へ不安そうな視線を集めた。また一人、あらたに喧嘩に加わるのではないのかと、思ったのに違いない。そうした人々の思惑も無視して、丈吉はまっすぐに歩いた。

だが、四人の渡世人が、街道いっばいに広がっている。そこを通り抜けることは、簡単でできなかった。

「道を開けておくんなさい」

誰にともなく、丈吉は声をかけた。低いがどこことなく凄味が感じられる声だった。

「なにを……！」

丈吉に背中を向けていた又兵衛の身内が飛びあがるようにして振り向いた。

「ここを、通らせてもれえてえんでござんすが……」

抑揚のない声で、丈吉は同じ意味の言葉を繰り返した。

「やかましいやい！」

「巻添えをくわねえように、引っ込んでいやがれ！」

「今日はやけに、風来坊が通りかかるじゃあねえかい。束にして、片付けちまってもいいんだぜ！」

一の宮の又兵衛の身内たちが、競うようにして凄んでみせた。どの顔も、青白くなっている。長脇差を抜きあっただけで、恐怖に駆られているのであった。恐ろしさのあまり、荒々しいことを言ったりするのである。

丈吉は、何の反応も示さなかった。その場に、うつそりと佇たたずんでいた。それを連中は、疎すみあがったものと解釈したらしい。三人は再び、道中支度の渡世人の方へ向き直った。

「さあ、どうするんでえ！」

三人のうちの一人が、渡世人に長脇差を突きつけた。

「そんなに、俺の正体が気にかかるのかい」

道中支度の渡世人が、鼻先で笑った。

「野郎！」

「舐なめやがって……！」

「たたっ斬れ」

又兵衛の身内たちは、いっせいに長脇差を振りかぶった。

「名は、佐平だぜ」

慌てて後退しながら、道中支度の渡世人が言った。

「佐平だけじゃあ、分らねえやい！」

「どこのどいつか、聞いているんでえ！」

「もったいぶるんじゃねえや！」

三人がまた、口を揃えて罵声を発した。この三人は、三人一緒でなければものも言えないようであった。

「それだけは、勘弁してもらえてえ」

佐平と名乗った渡世人は、矢鱈やたらと長脇差を振り回して三人の攻撃を防ごうとしていた。落ちてはいるが、腕力に自信がないようである。喧嘩度胸はあっても、腕がともなわないというタイプであった。

「我慢ならねえ！」

「やっちまえ！」

「くたばれ！」

またしても、三人の言葉が同時に飛んだ。だが今度は、言葉だけではなかった。三方から佐平を押し包み、狂ったように長脇差を繰り出した。何度か長脇差が触れあい、不気味な金属音があたりに散った。

三人のほうも、無我夢中である。しかし、佐平という渡世人は、それを追い散らす力さえ持

つていなかった。佐平は突きとばされて、地上に尻餅しりもちを突いた。

「待ちねえ」

丈吉の、やや鋭くなった声が、男たちの怒号に重なった。次の瞬間、丈吉は三人が作った輪の中へ、割って入っていた。丈吉の左手が、水平に走った。三人のうちの一人が、わっと叫び声をあげた。その男の顔に、赤い線が描かれていた。

鼻柱を中にして、両頬へ真一文字に傷が刻まれたのだった。他の二人が、戸惑ったように丈吉を眺めやった。仲間の顔に、なぜ傷がついたのか、理解できなかったのだ。丈吉は、長脇差を抜いていなかった。それなのに、仲間の一人の顔が血で染っていたのである。

丈吉は無言で、二人の男の目の前に左手を突き出した。男たちは目を見張った。丈吉の左手には、三本の指しかない。小指と薬指が、根本から切断されている。引きちぎったみたいな切断のあとが、醜く不気味であった。

残っている三本の指の爪が、一センチほどの長さののびている。その爪が刃物のように、鋭く磨かれていた。男たちはそれを見ただけで、凝然と立ちすくんだ。連中の顔色が、一段と青ざめた。

「お前は……！」

一人が、蚊の鳴くような声で言った。今度に限り、他の二人は沈黙を守っていた。

「お前さん、御子神の丈吉さんじゃあねえんですかい」

佐平という渡世人が、ホッとしたように立ちあがった。

「へい。房州無宿の文吉でござんす」

文吉が、物憂く答えた。途端に、又兵衛の身内たちが走り出した。この場合も三人の気は合っていた。一の宮の方向へ、三人は一目散に逃げ去った。軒下に避難していた人々が、解放されたように揺れ動きはじめた。それはすぐ、宿内の緩やかな人通りとなった。

「礼を言わせて、いただきやすぜ。御子神の文吉さん……」

佐平が、三度笠に手をかけた。年は三十五、六だろうか。色が黒く、精悍そうな顔つきだった。見た目には、仲々の貫禄が具そなわっている。

「妙な意地を張りやすから、危ねえ目にも逢うんでござんすよ」

文吉はそう言い残して、さっさと歩きだしていた。

「待っておくんなさい」

佐平が、慌てて後を追ってきた。

「何かご用でも……?」

前を向いたままで、文吉は気のない尋ね方をした。

「そういうわけでもねえんですが、ちよいとばかり言い訳をさせてもれえてえんですよ」

肩を並べながら、佐平は自分の言葉に頷いた。

「別に、何も責めちゃあおりやせんぜ」

「文吉さんは意地を張るからと言いなすったが、決してそういうわけじゃあねえんで……」

「それならそれで、いいじゃあござんせんか」

「いや、言わせておくんなさい。あつしは、ただの流れ者にござんす。ところが、今は信州小田井の武吉親分のところに、客分として厄介になっておりやす。実はその武吉親分のお伴で、信州からまいりやしたが、事情があつて一足遅れたんでござんす。武吉親分の客分になっていることを知られたくないために、あくまで名なしの権兵衛で通そうとしたようなわけでした……」

「どうして、小田井のお貸元の客分でいなさることを、隠したかったんでござんすかい」

「ご存知ねえだろうと思ひやすが、この先の福島で大した賭場が開かれることになっておりやしてね。武吉親分もそこへ顔を出しに信州から、おいでになられやしたんで……」

「そんなことなら、この土地の渡世人に知られても、差し障り^{さわ}はねえんじゃあねえんですかい」

「そいつが、そうはいかねえんで……。この賭場には、関八州それに信州の名だたる親分衆が顔を揃えることになっておりやす。いずれも上州のさるお貸元と、付き合ひのあつた親分衆ばかりでござんしてね」

佐平は、深々と溜め息をついた。ひどく真剣な面持ち^{おもて}であつた。

「上州の、さるお貸元……？」

丈吉がはじめて、佐平のほうへ目を転じた。

「この賭場のあがりも、そのお貸元へのお見舞^{みまひ}ということに、なる筈でござんす」
「そのお貸元が、病いの床に臥^ふつておられるんですかい」

「そうじゃあねえんで……。お上のお手配を受けて、長い兎状旅を重ねておられるんでござんすよ。そのための路銀のたしにもと、親分衆たちが申し合わせをなすったとかで……」

「兎状持ちの、お貸元となりやあ……」

丈吉の目に、熱っばさが増した。

「それで、たとえ土地の渡世人であろうと、めったに明かすことはできなかったというわけでは……」

佐平は、丈吉が示した変化などには頓着なしに言った。

「そのお貸元とは、忠治親分のことじゃあねえんですかい」

丈吉の口調が、やや堅くなった。声の震えを、隠すためだった。

「へい。お察しの通り、国定村の忠治親分でござんすよ」

佐平が歩きながら、声を落としてその名を口にした。

2

その賭場は、福島の前宿のすぐ近くで開かれるという。富岡は、城下町でこそないが、前田丹後守の領地内である。警察力がなかったにしろ、そこで大がかりな賭場を開くことは、やはり禁物であった。

それに比較して、福島の前宿は、あらゆる意味で賭場を開くのに都合だった。宿場とはいふものの、福島には一軒の旅籠屋もない。交通の便は悪くないし、人目にもたらずに済むのであ